



斜里町立知床ウトロ学校では、8年生になると、「教えられる側」から「教える側」へと立場が変わる。事前に知床財団がクマ授業で下級生に伝えるべき内容や授業の趣旨を指導し、本番に向けて繰り返し練習を重ねる。

Point 知床の子どもの合言葉

—もしもヒグマに出会ってしまったら—

- あ わてない
- さ わがない
- は してにげない
- ゆ っくりさがって
- き ちんと大人に知らせる



ヒグマと共に生きる知床

～クマ授業がつくる地域の未来～

文 普及企画係 米田 紗衣

羅臼町では、幼稚園児もクマ授業を受講している。就学前の子どもたちに「みんなの近くにヒグマがいる」ということ、そして「ヒグマがいて当たり前の地域」ということを知ってもらう。授業の中ではヒグマに出会った時の合言葉「あさはゆき」を通して、ヒグマ遭遇時の対処法についても学ぶ。



▲ クイズに積極的に取り組む子どもたちの様子



▲ 授業では実際の頭骨や毛皮に触れる

鼻の奥をくすぐる土の匂い。ヒグマが冬眠から目覚める季節がやってきた。この時期ならではの知床財団の重要な仕事、それが「クマ授業」だ。

クマ授業とは、主に知床に住む子どもたちを対象に基本的なヒグマの生態から遭遇回避の方法、下校時に会ってしまった場合の対応までを幅広く教える、知床財団独自の取り組みだ。斜里町内では3校全ての小学校、羅臼町内では幼稚園から小学校までが毎年受講している。知床において、「ヒグマについて学ぶ」ということは、いわば義務教育のようなものだ。

低学年にも楽しくヒグマについて学んでもらえるよう、ヒグマの生態や特性、正しい対処法に関するクイズを出題すると、その正解率の高さに驚かされる。また着ぐるみを用いた遭遇時の実演も高学年になればすっかりお手の物だ。全国的に見ても、これほどクマの知識が豊富な生徒が集まる地域は知床以外にはないのではないかと思うほどだ。それだけ、この地域においては「ヒグマが身近な存在だ」ということを物語っている。

学年を重ねると、内容も発展し、「ヒグマとどう共生していくか」や「知床でどのようにヒグマが管理されているか」についても学習する。斜里町内で最も世界自然遺産エリアに近い斜里町立知床ウトロ学校の9年生は、学びの集大成として、新千歳空港で観光客を対象としたクマレクチャーを実施する。知床が、知床財団だけではなく、地域の子どもたちも一体となって、ヒグマの普及啓発に取り組んでいる地域であることを誇りに思う。

授業の中で子どもたちに必ず伝えていけることがある。知床にはヒグマに関する課題が多々ある。けれど、ヒグマは知床の生態系において非常に重要な役割を担っている。だからこそ、これからは彼らが生きていける場所、地域にしていかなければならない、ということ。

こうして学びを受け継いでいく子どもたちがいる限り、「ヒグマと共に生きる知床の未来」はきっとこれからも守られていくだろう。

鼻の奥をくすぐる土の匂い。ヒグマが冬眠から目覚める季節がやってきた。この時期ならではの知床財団の重要な仕事、それが「クマ授業」だ。

クマ授業とは、主に知床に住む子どもたちを対象に基本的なヒグマの生態から遭遇回避の方法、下校時に会ってしまった場合の対応までを幅広く教える、知床財団独自の取り組みだ。斜里町内では3校全ての小学校、羅臼町内では幼稚園から小学校までが毎年受講している。知床において、「ヒグマについて学ぶ」ということは、いわば義務教育のようなものだ。

低学年にも楽しくヒグマについて学んでもらえるよう、ヒグマの生態や特性、正しい対処法に関するクイズを出題すると、その正解率の高さに驚かされる。また着ぐるみを用いた遭遇時の実演も高学年になればすっかりお手の物だ。全国的に見ても、これほどクマの知識が豊富な生徒が集まる地域は知床以外にはないのではないかと思うほどだ。それだけ、この地域においては「ヒグマが身近な存在だ」ということを物語っている。

学年を重ねると、内容も発展し、「ヒグマとどう共生していくか」や「知床でどのようにヒグマが管理されているか」についても学習する。斜里町内で最も世界自然遺産エリアに近い斜里町立知床ウトロ学校の9年生は、学びの集大成として、新千歳空港で観光客を対象としたクマレクチャーを実施する。知床が、知床財団だけではなく、地域の子どもたちも一体となって、ヒグマの普及啓発に取り組んでいる地域であることを誇りに思う。

授業の中で子どもたちに必ず伝えていけることがある。知床にはヒグマに関する課題が多々ある。けれど、ヒグマは知床の生態系において非常に重要な役割を担っている。だからこそ、これからは彼らが生きていける場所、地域にしていかなければならない、ということ。

こうして学びを受け継いでいく子どもたちがいる限り、「ヒグマと共に生きる知床の未来」はきっとこれからも守られていくだろう。

知床時間を編む、ライブラリーコーナー

知床羅白ビジターセンターでは、羅白町からの受託事業の一環として、来館者向け書籍の新規購入と管理を行っています。

毎年、スタッフで意見を出し合いながら本を選び、図鑑や絵本、自然系専門書、漫画、写真集まで幅広く揃えています。大切にしているのは、思わず手に取りたくなること、そして少しの“知床らしさ”を感じられること。

さらに、春夏秋冬に合わせてレイアウトも工夫し、季節ごとのテーマで本を紹介しています。

本を通して、知床で過ごす時間がより豊かになることを願って、これからもライブラリーコーナーづくりに力を注ぎます。



「しゃりコレ」に出演しました!

斜里町有志の団体により企画された「しゃりコレ」に、知床財団のスタッフが出演しました。「しゃりコレ」は町民みんなで作るファッションショーをコンセプトに、町民が普段着や仕事着、趣味の衣装などを身にまとい、町民が制作した楽曲に合わせてランウェイを歩くイベントです。運営スタッフも斜里町にゆかりのある方々によって構成されており、斜里の魅力が詰まったイベントの一つです。

今回、知床財団からは3名が出演し、それぞれ利用者案内、ヒグマ対策、エゾシカ捕獲で実際に使用している仕事着を着て臨みました。

本番では来場者の多さに緊張しましたが、多くの拍手や声援をいただき、笑顔で楽しむことができました。来場者の皆様に知床財団スタッフの新たな一面をお伝えできていたら幸いです。



知床財団のスタッフは普段どんな仕事をしているの？
あまり知られていない日々の取り組みをご紹介します。

鳥になるのもなかなか大変 エゾシカ航空カウント調査

2月下旬から3月上旬。環境省からの受託業務「知床生態系維持回復事業エゾシカ航空カウント調査」のため、保護管理事業系のスタッフはヘリコプターに搭乗し、知床の空を飛び回っていました。

この業務は、知床半島で行われているエゾシカの個体数調整事業に役立つため、毎年同じ時期に空中からシカの数のカウントし、増減の傾向を調べることを目的とする、いわば「個体数調整事業の答え合わせ」的な業務です。



フライト前に入念に飛行ルートを確認



緊張の中、ヘリコプターへ乗り込むスタッフ



いよいよ離陸し、調査開始!

あらかじめ決められたルートをヘリコプターが対地高度・速度を一定に保ちながら飛行し、搭乗した調査員が窓からシカを数え、位置と頭数を記録します。この時期、知床岬付近は特にシカが多く集まるため、上空を旋回するヘリから写真を撮影し、拡大してシカの性別や年齢構成などを記録することもあわせて行います。

今年は、世界自然遺産地域の隣接地域も調査する5年に1度の年でもあるため、調査エリアは例年の約3倍、1フライトの時間も約2倍。万全を期するため、調査員は前日早めに就寝、おなかの調子を整え、食事量を調節し、人によっては酔い止めも飲んで、ヘリに乗り込みます。

翌年の個体数調整計画の根拠ともなる重要な業務。調査員は揺れるヘリに翻弄されながらも、真剣に地表を見つめ続けました。



シカ発見!

何頭ですか!